

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00957

研究課題名（和文）琉球列島の築城技術にみる土木史的研究

研究課題名（英文）Civil engineering historical research on the castle construction technology of the Ryukyu Islands

研究代表者

山本 正昭（Yamamoto, Masaaki）

沖縄県立芸術大学・芸術文化研究所・研究員

研究者番号：80789488

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究における学術的独自性と創造性で立ち上げた、地域間交流の中で国家間交流とは異なる民間交流における技術の伝播について捕捉していく中で城塞化していく遺跡に見る土木技術の変容から読み解きを行っていくという命題を設定した。中国大陸ならびに日本列島からといった周辺地域から琉球列島の技術伝播がグスクに投影された土木技術からの読み解きを試みた。

結果、石積み技術においては琉球列島内で独自に成立していった土木技術であることが指摘されたと同時に、周辺地域からの影響においては縄張り上における側面において確認できることが明確となった。また、各地域によってその受容の様相が大きく異なってくることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては東アジアにおける土木技術についての歴史的な背景を考古学的な視点から明らかにさせようとしたことにより、土木技術そのものの意義を物質的な観点で捉えることができる適度、可能であることを示した。時代の要請により土木技術の力点がどの側面において強く現れ出てくるのかは、地域性や人材の動員力、資材確保のための他者との関係性、そして地域権力との有り様によって変容してくると言える。

このような東アジアにおける土木技術史を検証し整理したことで、今日に見る土木技術の抱えている課題や将来における技術の方向性について、考えていく上での素材として、本研究は社会的意義を見出すことができるものと言える。

研究成果の概要（英文）：This research project was launched with academic originality and creativity, and the proposition was set to interpret the changes in civil engineering technology seen in ruins that were transformed into fortified sites while capturing the spread of technology in private exchanges between regions, which differ from exchanges between nations. An attempt was made to interpret the spread of technology in the Ryukyu Islands from surrounding regions, such as mainland China and the Japanese archipelago, through the civil engineering technology projected onto the gusuku.

As a result, it was pointed out that stone masonry technology was a civil engineering technique that was established independently within the Ryukyu Islands, while at the same time it became clear that the influence of surrounding regions could be confirmed in terms of territorial design. It also became clear that the manner in which it was adopted varied greatly depending on the region.

研究分野：考古学

キーワード：石積み技術の変化 石積みの高層化 グスク時代の土木技術 築城技術の独自性 城郭概念の確立

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

沖縄県内における城郭遺跡の研究については主に出土遺物による時期の同定といった個別対象での研究が大半を占めており、総体としての研究は無かった。そこで本研究において遺構からの検証と、それに関係するグスクの土木事象の具体像を明らかにすることで新たな視点での研究領域を展開することを試みた。加えて琉球列島周辺の地域に所在する城郭遺跡との比較・検証を通して、琉球列島における城郭遺跡の特性を明示できるものと想定し、従来まで調査が行われていなかった中国大陸沿岸部の城郭遺跡も調査対象の射程に入れていくことにした。

本研究が開始された令和3年度に、東アジア地域の城郭遺跡についてその情報を収集する目的で中国・福建省での実地調査を予定していたものの、新型コロナウイルスの世界的な蔓延による想定外の状況が発生したことから、主に沖縄県内および奄美諸島での調査に切り替えた。しかし、沖縄県内でも新型コロナウイルス蔓延による緊急事態宣言が発令されたことにより外出制限ならびに入域制限があった影響で、沖縄本島内での実地調査に重点を置いた研究に切り替えることにした。

2. 研究の目的

琉球列島における歴史時代区分においては、先史時代と有史時代の接続点となる時代である『グスク時代』は社会様態が大きく変化した時代であり、従来までに様々な側面からの検証や考察が展開されてきた。とくにグスク時代が成熟してくる14世紀に入ると奄美諸島から八重山諸島にかけての地域では、在地首長が小地域単位で頻出していくようになる。この背景として九州や中国大陸からの人や物が大量に流入してきたことや農耕の進展による蓄財の発生、更に各地域における格差が生み出されてきたことを契機として政治的並びに武力的統合が進展していくことが挙げられる。

以上のことから本研究における主な目的として、グスクに見られる防御性や土木技術が中国大陸由来の内容を含み込むものであるのか、それとも日本本土などの他地域からの土木技術からの由来であるのか、舶載陶磁器など、物の搬入状況とはまた別の他地域からの搬入の様相が技術伝播の側面でどのように整理できるのかについて明確に捕捉していくことを目的とした。

3. 研究の方法

琉球列島各地に分布しているグスクならびに城郭遺跡において既に発掘調査が実施されている遺跡を中心に情報収集を行い、また石積みや平場、土塁、切岸、堀切といった遺構が明瞭に確認できる遺跡に焦点を当てて現場での踏査を行った。

残存している遺構の状況を把握するために写真撮影を現場にて行うと共に、画像では把握できない箇所においては簡易な図面の作成を行った。また、研究期間中に発掘調査を実施しているグスクや城郭遺跡においては発掘現場の巡検を行うと共に、発掘調査担当者からの聞き取りも並行して行った。令和3年度から令和5年度において沖縄本島内では16カ所のグスクにて、周辺離島では久米島にて3カ所、慶良間諸島では1カ所、伊平屋島1カ所、奄美大島3カ所、沖永良部島2カ所、与論島1カ所、宮古島2カ所、波照間島2カ所、石垣島1カ所、計32カ所のグスクならびに城郭遺跡の実地調査を行うに至った。

令和5年度には遺構の残存が良好な糸数グスクと玉城グスクの2遺跡において大規模な3次元測量を行い、3次元データを作成した。それを基に石積み技術の実態と全体の縄張り構成、そして平場の形態などの把握と検証を行い、グスク時代の土木技術の解明に資する基礎データとした。

4. 研究成果

琉球列島には300を超えるグスクが所在しており、それらのうち約100カ所において石積み遺構を伴っていることが確認されている。石積みを構成する石材並びに石積みの構築技法についてその実態を確認し、そしてそれらの分類を行った。その結果加工石材については8類型、石積み技法については13類型に分類することができる。以下、それらを挙げていく。

(1) 加工石材の実態と分類試案

まず、石材加工については自然石、粗割石、切石に大別することができ、粗割石と切石は以下に細分することができた。

粗割石(2分類)

- ①粗割石 面側のみを粗く平坦に加工している。 粗割石 面側を粗く平坦に加工し、輪郭を四角形に粗く整えている。

切石(6分類)

- ①四角形切石 面側の輪郭を四角形に整えている石材。面とは反対側の控え部分は未加工もしくは粗加工となる「四角形切石」と控え部分も平滑に加工して面を仕上げる「四角形切石」に細分される。
角欠き切石 面側の輪郭を四角形に整えているが、角部分が内側への「L」字状の欠けが見

られる石材。面と反対側の控え部分は未加工もしくは粗加工となる「角欠き切石」と控え部分も平滑に加工して面を仕上げる「角欠き切石」に細分される。

多角形切石 面側の輪郭を五角形以上の不整形に成形している石材。これらの中には合端の隙間をつくらないように面側の輪郭を丁寧に加工している石材を見ることができる。

曲面切石 グスクに見られる石積みで主に隅角部に見られる、面側が緩やかな曲面を有した石材。面側は四角形ならびに多角形となっているものが見られる。

隅頭石 面側が上方外側に反りを有した石材。グスクの石積みで隅角部の天端に積載している。

眉石 面側が緩やかな円弧を描くように曲がっている石材。アーチ門の天井を構成する石材であり、2～3個体でアーチを構成する事例が多く、稀に石材の下部をアーチ状に割り抜いて精緻に仕上げる事例が見られる。2個体で構成される事例眉石は左右対称の形で対して見ることができる。

これら加工石材については次に掲げる石積み技法との相関性が強く現れ出ており、またそれぞれの組み合わせも自然石と粗割石、粗割石と切石で確認することができるが、自然石と切石の組み合わせは見ることができない。

次に石積み技法についてであるが、粗割石、切石といった加工石材が確保できる環境下において石積み技法が深化していくと共に、石材そのものの岩質により加工の難易度が変化することから、石積み技法の成立する地域も偏差が現れてくる。とくに沖縄本島中南部に分布する琉球石灰岩は軟石系であることから加工しやすく、そのため石材相互を噛合わせるための精緻な加工が施される。このことから石積み技法にも多くのバリエーションが生まれてくる。

(2) 石積み技法の実態と分類試案

石積み技法においては自然石のみで組み上げる野面積みと加工石材で組み上げる切石積み到大別することができる。そして、以下のとおり野面積みについて細分類を行った。

野面積み 類

未加工の石材をマウンド状に積み上げるのみで、面石を組み上げることはしない石積み。その高さは2m以下である。

野面積み 類

未加工の石材を積み上げ、面石を組み上げる石積み。組み方は乱雑で、目地はあまり通らず、合端のかみ合わせもほとんど見られない。その高さは2m以下である。

野面積み 類

琉球石灰岩を積み上げ、粗加工された面石を組み上げる石積み。面石は粗く成形していることから合端のかみ合わせが見られる。その高さは最高で2.5m前後を有する。

野面積み 類

石材は古期石灰岩を使用しており、面石は粗割りした平滑面を面側に向けて組み上げる石積み。合端のかみ合わせはあまり見られず、目地に隙間が見られる。これは、古期石灰岩が琉球石灰岩と比べて硬質で加工の自由度が低いことから、面石の精加工が困難であったことに因る。その高さは2m以下である。

野面積み 類

石材は古期石灰岩や輝石安山岩を使用しており、面石は粗割りした平滑面を面側に向けて組み上げ、横目地が局地的に見られる石積み。石材は面側だけではなく、側面も粗割りしていることから合端のかみ合わせを部分的に見ることができる。その高さは最高で7～8mを有する。

また、切石積みについては四角形切石で構成される布積みと多角形切石で構成されるあいかけた積みに分けることができる。以下のようにそれぞれを細分類したので掲げてきたい。

布積み 類

縦目地ならびに横目地が通る布積み。横目地はあまり長く通っていない。加工度が比較的高くない石材が多用されている。

布積み 類

縦目地ならびに横目地が通る切石積みで石材に角を欠いて、合端をかみ合わせている。

布積み 類

縦目地が通り、横目地が5石以上通る切石積み。角欠きは見られるがあまり多用していない。

布積み 類

縦目地はほとんど見られず、横目地が長く、ほぼ水平に通る切石積み。石材はかなり精緻に加工されており、長手の長方形石材が多用されている。また、目地の隙間はあまり見られず、面側は丁寧に研って化粧仕上げを施している。

あいかけた積み 類

四角形並びに五角形に成形した面石を乱雑に組み上げる切石積み。粗加工された石材、粗加工された石材共に組み上げており、目地に隙間が見られる。

あいかけた積み 類

四角形並びに五角形に成形した面石を乱雑に組み上げる切石積み。精加工された石材を組み上げており、目地の隙間はあまり見られない。

あいかけた積み 類

主に五角形、六角形に成形にした面石を組み上げる切石積み。石材の加工がやや粗いため、目地に隙間が見られる。

あいかた積み 類

五角形、六角形に成形にした面石を組み上げる切石積み。石材は精加工されていることから目地の隙間はほとんど見られない。また、面側を丁寧な化粧仕上げをしている。

石積み技法については野面積みが 5 分類に切石積みは 8 分類としたが、それぞれの出現年代については各遺跡の発掘調査により報告されている遺跡の年代から 13 世紀後半から 15 世紀中頃までに収まることが言える。

(3) 石積み技法に見る石積み配置の検証

上記にて切石を用材とする石積みとして布積みとあいかた積みを挙げたが、本節ではそれらが主にグスクのどの位置に見ることができるのかについて触れていきたい。

まずは布積みとあいかた積みが見られるグスクの内、野面積みと布積みを確認できるグスクに関しては、島添大里グスクでは中心となる石積み囲い内にある礎石建物の基壇を構成する石積みに布積みが見られる事例がある。そして、糸数グスクでは出入口と張り出し施設ならびに北西部の石積みの一部といったように東側を区切る石積みに多用されている。更に具志頭グスクでは張り出し施設に、多々名グスクと久米島具志川グスク、安慶名グスクでは出入口周辺といったように人目が付くような部分に布積みが配置されている傾向にある。一方で浦添グスクや玉城グスクではほぼ全体的に石積みは布積みとする事例が見られるものの、やはり限定的に布積みが配置されている事例を多く見ることができる。

そして、野面積み、切石積み、あいかた積みを確認できるグスクについても各グスクによって各場所における石積みの様相がそれぞれに異なってくる。

まずは勝連グスクではほぼ全体的に布積みであり、野面積みやあいかた積みは二の郭の一部にしか確認することができない。豊見城グスクでは発掘調査により城壁の根石周辺が検出されているが、野面積みやあいかた積みが混在している(豊見城市教育委員会 2016、2021、2022)。他方で戦前の古写真で伺える一の郭のアーチ門周辺の石積みは布積みとなっている。糸満具志川グスクにおいては全体を囲繞する石積みは野面積みであるが、その内部に見られる基壇状遺構は布積みとあいかた積みで構築されている。座喜味グスクでは全体的にあいかた積みと布積みが混在した石積みであることが確認できるが、出入口のアーチ門周辺は布積みとなっている。また、知念グスクではクーグスクと呼ばれる一帯の石積みは野面積みでミーグスクと呼ばれる場所の石積みは布積みとあいかた積みを確認することができる。布積みは出入口のアーチ門周辺のみでミーグスクに見られる石積みのほとんどがあいかた積みとなっている。そして、中城グスクでは北西側の井戸郭と三の郭の石積み、一の郭の基壇は基本的にあいかた積みで立ち上げられており、井戸郭と三の郭の出入口周辺らびに一の郭や二の郭、西の郭、南の郭は布積みであることが確認される。また、後世の石積み修築箇所においては野面積みであることが確認されている(渡久地 2016)。

最後に首里城に関してはあいかた積みと布積みが混在した石積みを見ることができるとは、出入口周辺の石積みは布積みが比較的多く確認することができる。そして、最も多くの石積み技法の種類が確認できるのは正殿基壇の石積みである。14 世紀後半以降に首里城の正殿地区では 6 基の礎石基壇建物がほぼ同地点で建て替えが行われており、各時期によりその積み方が異なる。15 世紀中頃まで機能したとされる正殿地区第一期基壇では精緻に面側が平滑加工された布積みで、15 世紀後半から 16 世紀頃まで機能したと推定される同地区第二期基壇はやや粗い多角切石で組み上げられたあいかた積みで、その東側に取り付く石段は布積みとなっている。更に同地区第三期基壇は 17 世紀初めから中頃でやや粗い多角切石で組み上げられたあいかた積みで同地区第四期基壇は 18 世紀前半～19 世紀後半で野面積みと粗い多角切石で組み上げられたあいかた積み、同地区第五期基壇は 18 世紀から 1945 年までで、切石積みとなっている。このように各地のグスクで確認できる石積みには、場所によって石積み技法が異なるといった事例が多く確認できる。中城グスクでは北西側の井戸郭と三の郭の石積みがあいかた積みであることは 15 世紀前半の増築箇所であると評価しており(新城 1982)新たな石積み技術として一の郭に見るような布積みとは異なるあいかた積みを採用しているものと解釈されている。しかし、それ以外のグスクにおいては出入口周辺にて切石積みを多用している。知念グスクや中城グスク、首里城、座喜味グスク、豊見城グスクではアーチ門を構築する関係から布積みとする必要があるものの、知念グスク以外はアーチ門の両袖部分の 2～3 m の石積みは布積みとしているケースが見られる。また、加工石材で四角切石 や角欠き切石 が久米島具志川グスクや糸数グスク、座喜味グスクでは出入口周辺に見ることができるが、これは出入口を構成する切石として控え部分や側面を平滑に仕上げたブロック状に加工した切石を組み上げていったものと見ることができる。とくに出入口の隅角部においては 2 つの面を持つ切石となることから、四角形切石 や角欠き切石 と比べてもその整形に手間がかかる。また、四角切石 や角欠き切石 は四角形切石 や角欠き切石 よりも個体数がかなり限られていることから、切石の中でも限定的に使用される切石としての位置付けであることが指摘される。

更に首里城正殿地区第一期基壇、第二期基壇は比較的横目地が通る布積み 類であり、かなり大きい四角形切石を組み合わせている。これと同様の積み方を窺えるのが中城グスク正門と裏門とされる出入口周辺の石積みである。両出入口共に中城グスクへ入る最初の出入口であり、裏門

はアーチ門で表門は櫓門状となっている。

以上、中城グスク正門と裏門と首里城正殿地区第一期基壇、第二期基壇に見られる石積み技法については布積み類であることに加えて、面に対して丁寧に平滑調整が施されている長手の切石が多用されていること、そして合端の間隙があまり見られないといった共通性も見て取ることができる。よって、外郭の出入口や中枢となる礎石建物の基壇といった美観が意識される位置に布積み類が配置されている蓋然性が高い。

まとめると、石積みにおいては防御性を高めていくことに対して高層化させていくための石積み技法が先鋭化されていくのに対して、四角切石や角欠き切石や布積み類が見られる個所は人目が付く、若しくは美観が重視されるといった、「見せる」ことを目的とした加工石材・石積み技法が導入されていることが考えられる。

(4) 本研究のまとめ

グスクに配置された石積みについては場所によって石積み技法ならびに加工石材の寸法や加工度が異なることはこれまでに触れたとおりである。この点に関しては各場所にて石積み投影された機能や効果を意図したものであり、防御性を向上させるために石積みの高層化していくことや、そして視覚的效果を狙って精緻に石材を加工し積み上げていくといった具体的な役割が各場所にて石積みと与えられているものと見ることができる。具体的にはグスクに石積みが見られるようになる13世紀後半は障壁としての小規模な石積みが、14世紀中頃には防御性が深化することに伴って切石による石積みを導入、それとほぼ同時期に出入口や基壇の石積みといった、人目の付く場所に切石積みを多用するといったことになる。またそれは、地域の首長である按司によるグスクの整備が図られていくのが14世紀中頃からになるものと捉えられる。この時期の按司がどのようにグスクの石積みを構築したのか、その詳細は分からないが15世紀から16世紀中頃までの史料には多くの人々が動員されていたことが断片的であるが窺い知れた。また、石材を加工するには大量の石工具が必要となってくることも史料上に見える金属製、石製の石工具の問題から見えてきたと言える。これらからグスクの石積みを構築するにあたっては組織的な動員力や綿密な計画性、そしてそれを実現するための下準備といった、細部において調整する役割を担うことができる人物の存在が必須となってくる。その意味においては様々な利権を集中的に掌握する按司の存在がグスクにおける石積みの構築とそれが先鋭化していく上で欠かせないと言える。それが最も端的に示しているのが14世紀中頃のグスクにおける切石積みの導入以降であると見ることができる。

最後に石積みそのものにおいては琉球列島内で石材加工ならびに石積み技法が発展している状況が見られることから、中国大陸沿岸部や日本列島からの技術伝播は積極的に見出すことができない。但し、城壁が凸上に張り出す「張り出し施設」については中国大陸沿岸部に散見できることから、石積みを持った城郭の縄張りでの技術導入は見出すことができるものと思われる。

(5) 最後に

すでに触れたように本研究の期間の半分が世界的な新型コロナウイルス蔓延により、調査の実施が見送られたことから、本来の企図していた研究内容の50%分での成果であるとされる。本研究のもう一つの試みであった琉球列島と他地域との比較、検証しその土木技術の伝播について考察していくことがほぼ叶わなかった。この点については想定外の事象であったことを鑑みても、後悔が残る研究成果であったと言える。

主に琉球列島各地に分布する石積みを有するグスクならびに城郭遺跡を対象にして、土木技術の実態に触れていったが、それぞれの地域において特徴が見られる。それは産出できる石材の岩質により、供給できる加工石材が異なること、それに関係して積み方も限られてくるといった事情である。加えて石材確保が困難な奄美大島においては斜面を削り傾斜を付けて防御壁とするような石積みを有さずに防御性を先鋭化させていく状況を見ることができた。ただし、それらの土木技術に対する実態については実地調査数が限られたためにその詳細を検証するに至らなかった。

更に土木技術の伝播については琉球列島内だけでなく周辺地域との関係性の中でどのような要素で関係性を有してくるのかについて、今回はほとんどその検証が行えなかった。この点については今後の大きな研究課題として残されたと言え、同時に研究代表者として、成果として挙げることができなかったこととして頭をもたげる案件として残された。

上記については、今回の研究で得た成果を整理し、更なる考察を深めたうえで、今後また機会があれば海外との土木技術の伝播についての歴史的研究として研究を継続していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 41
2. 論文標題 グスク時代における石積み技術と高層化の相関性について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南島考古	6. 最初と最後の頁 47 - 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 第74巻2号
2. 論文標題 グスクをめぐる解釈と到達点についての提要	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 97 - 105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 17
2. 論文標題 グスクの石積みに見られる石材加工についての基礎的考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 1
2. 論文標題 城壁に見る張り出し施設の機能とその伝播についての基礎的考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 山川偉域の考古学	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 101
2. 論文標題 那覇湊の海防化と首里城	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 港湾	6. 最初と最後の頁 45-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 97号
2. 論文標題 加工石材から見るグスクの石積み技法とその成立背景	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 南島史学 (2024年12月発行)	6. 最初と最後の頁 40-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本正昭	4. 巻 15
2. 論文標題 グスクに見る石積み技法の変遷	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山本正昭
2. 発表標題 第一尚氏によるグスクの改変について
3. 学会等名 沖縄文化協会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本正昭
2. 発表標題 グスクにみる石積み技法の変遷
3. 学会等名 沖縄考古学会 5 月定例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本正昭
2. 発表標題 戦後から現在にかけてのグスク論について
3. 学会等名 沖縄考古学会6月定例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山本正昭
2. 発表標題 9～11世紀における琉球列島の対外交易とその展開
3. 学会等名 2023 年度新北市国際考古学フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果の一部については沖縄県立博物館・美術館主催の学芸員講座、中城村教育委員会の生涯学習講座、豊見城市教育委員会文化講座、城西大学水田美術館主催展覧会『英雄 尚巴志-はじまりの統一王-』関連講座などの一般向けの講演会において引用した。また、実地調査で得られた成果については沖縄県立玉城青少年の家主催「歴史散歩」ならびに南城市教育委員会主催「尚巴志史跡巡り」にて一般参加者に向けて新たな成果についての解説と現地での案内を行った。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石井 龍太 (Ishii Ryota) (00712655)	城西大学・経営学部・准教授 (32403)	
研究分担者	森 達也 (Mori Tatsuya) (70572402)	沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・教授 (28001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関